

ドイツ語における「進行中の出来事」の表現形式について

愛媛大学

野上さなみ

1. はじめに

ドイツ語は、アスペクトの概念が文法範疇として確立している言語ではない¹⁾が、「動詞 *sein* + 前置詞 *am* + 名詞化された不定詞」から成る「進行形」(例: *Ich bin am Kochen*. 私は料理をしている。)を持っている。この進行形式は、長らく使用地域が限定された現象として扱われてきたが、1990年代以降には、標準ドイツ語(とりわけ日常口語)での使用が増加していることも指摘されている(Baudot: 2005 / Van Pottelberge: 2009 / Hentschel & Weydt: 2021)²⁾。一方で、この進行形の使用は必須ではないため、出来事が「進行中である」ことを積極的に叙述する場合でも、その表現方法は多岐にわたる結果となっている。

本稿ではこういった背景を踏まえて、英語で進行形(*be+ing*)を使用している部分のドイツ語訳を対象に、ドイツ語での進行性表現の可能性を探る。その中でも特に「動詞 *sein* を利用した動詞の分析的構造」に考察の焦点を置き、英語で「動的な現象」として表現される出来事をドイツ語で言語化する際には、「ある種の状態」すなわち「静的な現象」を表現する形式が用いられるというパターンが見られることを示す。

¹⁾ Hentschel, E. & Weydt, H. (2021, p.34): … wie dem Deutschen, das … aber kein ausgebildete Aspektsystem etwas im Hinblick auf Perfektivität/Imperfektivität aufweist. / Zifonun, G. & Hoffmann, L. & Strecker, B. (1997, p.1861): Im heutigen Deutsch ist der Aspekt nicht oder – wenn man die peripheren Formen mit *am* + Infinitiv einbezieht – kaum grammatikalisiert. / Stobitzer, H. (1968, *Aspekt und Aktionsart im Vergleich des Französischen mit dem Deutschen, Englischen und Italienischen*. Diss. Tübingen, p.242): Eine Aspektopposition gibt es im Deutschen nicht… Der deutsche Sprecher ist deshalb häufig darauf angewiesen, mit nicht-verbalen Mitteln – z.B. Verbzusätze, Adverbien oder Konjunktionen – den realen Tatbestand wiederzugeben. (Stobitzerの見解はKrause, O. (1997, p.50)からの引用である。)

²⁾ Hentschel & Weydt (2021: p.128) は、以下のように指摘している: Früher wurde der Progressiv als regional begrenztes Phänomen angesehen und daher oft auch als “rheinische Verlaufsform” bezeichnet; inzwischen sind sich die meisten Grammatiker jedoch einig, dass es sich um eine über die ganze Sprachgebiet verbreitete Erscheinung handelt. Sie tritt zwar hauptsächlich in der Umgangssprache auf, findet aber zunehmend auch Eingang in die Standardsprache.

2. ドイツ語訳での「進行性」表現の分布

今回使用した資料は、Arthur Conan Doyle (1859-1930) によるシャーロック・ホームズ・シリーズの“*The Hound of the Baskervilles*” (バスカヴィル家の犬)とそのドイツ語訳2種類で、各例文の出典表記には以下の略記を使用する。

GE: 英語の原書 “*The Hound of the Baskervilles*” (サイト Projekt Gutenberg-DE 掲載)

GD: ドイツ語訳 “*Der Hund der Baskervilles*” (サイト Projekt Gutenberg-DE 掲載)

ITD: ドイツ語訳 “*Der Hund der Baskervilles*” (Insel Taschenbuch Verlag による書籍)

原書で進行中の出来事を示す *be-ing* 形式206箇所 of the ドイツ語訳 GD において、「進行性」を表現するための形態上の工夫が確認できたのは38箇所だった。この部分の ITD 訳も確認し、両ドイツ語訳の計76箇所 で用いられる表現の共通点を整理した結果が表1である。

表1: ドイツ語訳「バスカヴィル家の犬」における進行性の表現分類

表現の分類	GD	ITD	合計	概要
A. 副詞句の付加	13	4	17	原書に無い副詞句を付加しているもの
B. 定動詞のみ	0	15	15	進行性を表現するための形態上の工夫がないもの
C. <i>sein</i> を使った構造	13	5	18	—
① 名詞としての不定詞	1	0	1	進行形、およびこれに準ずる形式はここに含まれる
② <i>zu</i> 不定詞	4	2	6	
③ 動詞由来の名詞	3	1	4	
④ その他の状態叙述	5	2	7	前置詞句 + <i>sein</i> など
D. その他	12	14	26	原書と語彙内容が異なる動詞の使用、時制や法の転換など
総数	38	38	76	—

まず「A. 副詞句の付加」のグループの例は、どちらのドイツ語訳でも半数に届いていない。また、GD「C. *sein* を使った構造」と ITD「B. 定動詞のみ」の使用比率がほぼ同じであるなど、翻訳によって選択される表現方法にはかなりの相違が見られることも分かる。本節ではグループ A・B・D について簡潔に述べ、グループ C については第3節で詳しく扱う。

A. 副詞句の付加

グループ A は、原書には存在しない副詞がドイツ語訳で使用されている例である。全17例のうち、動詞の形態には特別な有標化がない、すなわち単に定動詞を用いているにすぎないものが半数以上の10例を占めている。使用頻度が最も高かった副詞 *gerade* (目下) を、進行性の標示要素とみなす (Dahl:1985) 考えがある一方で、**ich verhungere gerade*. (私は今ま

さに飢え死にしようとしている。)のような例が示すとおり、この副詞はあらゆる動詞と組み合わせられるわけではない (Hentschel & Weydt: 2021, p.40) ことも指摘されている。

野上 (2008, p.98) の調査では、全59例のうち *gerade* は21/25例が atelic 動詞と、*langsam* は10/10例が telic 動詞と共起していたことを受けて、今回の資料で確認された副詞を、共起する動詞の Telicity を基準に分類した結果をまとめると表2のようになった。たしかに、*gerade* と共起している動詞そのものは atelic なものばかりであるが、telic な「動詞句」と共起している例が今回の資料中に1つだけあったので、それを紹介しておきたい。

表2：副詞と共起する動詞の Telicity

atelic 動詞 (9例)		telic 動詞 (8例)	
2例	7例	6(各1)例	
<i>die ganze Zeit</i> (ずっと)	<i>gerade</i> (目下)	<i>allmählich</i> (次第に) / <i>eben</i> (ちょうど) / <i>hier</i> (ここで) / <i>jetzt</i> (今) / <i>mehr und mehr</i> (ますます) / <i>nachgerade</i> (だんだん)	<i>langsam</i> (次第に)

(1)は、自分がバスカヴィル家に向かうことができない理由を説明するホームズの台詞 (第5章) である。各文の構造を明確に示すために、和訳はできるだけ直訳にしておく：

- (1) a. At the present instant one of the most revered names in England **is being besmirched** by a blackmailer ... (GE)
この瞬間、英国で最も敬うべき名前の1つが、恐喝者によって汚されているところなのです…
- b. Im Augenblick **wird gerade** einer der besten Namen Englands von einem Erpresser **in den Schmutz gezogen** ... (GD)
恐喝者によって英国で最良の名前の1つが、今まさに汚辱の中へと引きずられる…
- c. Im Augenblick **wird** einer der geachtetsten Namen in England von einem Erpresser **besudelt**, ... (ITD: p.70) 今、英国で最も敬うべき名前の1つが、恐喝者によって汚される…

gerade が付加された GD の動詞句 *den Namen in den Schmutz ziehen* (名前を汚す) は確かに限界点を含む。これを直訳すると「名前を汚れの中へ引く」となり、これが比喩的に使われて「名前を汚す」という意味になる。動詞 *ziehen* (引く) そのものは ACTIVITY³⁾ だが、前

³⁾ Vendler (1967) による動詞四分類の動詞グループは、ACTIVITY のように大文字表記する。

置詞句 *in den Schmutz* (汚れの中へ) が限界点をもたらす。その結果、動詞句全体は「特定の限界点に向かって引っぱる (*ziehen*) 動作が進行する過程」を表す ACCOMPLISHMENT となる。そして、telic 動詞との共起がほとんど見られない *gerade* をこの動詞句に添えることができるのは、動詞 *ziehen* が表す「限界点に近づく段階」に焦点を当てているためであると考えられる。一方で、ITD のドイツ語訳はグループ「B. 定動詞のみ」に分類される。ここでは、*At the present instant* に相当する前置詞句 *Im Augenblick* があるため、原書にない副詞をあえて添えなくても、事態の進行性は理解され得ると訳者が判断した、あるいは「今これから…汚されようとしている」という意味のドイツ語に翻訳したと考えることができる。

B. 定動詞のみ

これは、原書の進行形動詞と語彙内容が一致する定動詞を使い、かつ原書には見当たらない副詞等の付加もない例のグループである。つまり、ドイツ語訳の動詞の形態が有標化されていないだけでなく、原書に存在しない「動詞以外の要素」の共起も確認できない例である。GD では、英語の進行形に対応する何らかの積極的な表現が全38箇所を確認できるのに対して、ITD では15/38箇所がグループ B に該当することからも、翻訳によって「進行性」の扱い方に大きな相違があることがうかがえる。

D. その他

原書の進行形動詞とは語彙内容がまったく異なる動詞を使った「言い換え」や、語彙内容が一致する動詞を使いながらも、時制や法を変換する等の例が見られた。なお、「言い換え」に該当するものであっても、「動詞由来の名詞」を用いているものはグループ C.-③に分類した。このグループ D についても、紹介する例は1つにとどめる。(2)は、米国からロンドンへの到着後に匿名の手紙を受け取ったバスカヴィル家の新当主ヘンリー卿に向けたホームズの問いかけ(第4章)である。両言語で動詞の語彙内容を対応させるのではなく、「進行中であること」が必須要素ではない場面への言い換えを選択している：

- (2) a. “Who knew that you **were going to the Northumberland Hotel?**” (GE)
 「あなたが Nhl ホテルへ向かっていたということを知っていたのは誰ですか？」
- b. »Wer wusste, dass Sie im Northumberland Hotel **absteigen würden?**« (GD)
- c. »Wer konnte wissen, daß Sie im Northumberland Hotel **absteigen würden?** « (ITD: p.48)
 「あなたが Nhl ホテルで下車するであろうことを、b. 知っていた / c. 知りえたのは誰ですか？」

原書では、動詞 *go* の進行形を使って「目的地に向かう最中である」という内的視点が明

示されているが、2つのドイツ語訳では、描写内容そのものを「進行性の概念」や内的視点が必須ではない「目的地で下車する（であろう）」ことに変更している。これにより、目的地に向けた移動が進行中であることを間接的に示すという仕組みになっている。

3. *sein* を使った構造

動詞 *sein* と組み合わされている各要素の特性を基準にして、表1にあるとおり①～④に下位分類した。①と②には少数ながら、ドイツ語の進行形 *am-* 構造、およびこれと競合する形式の1つ *dabei-* 構造が確認されたので、これらの形式について概観した後に、4つのグループそれぞれについて具体例を示しながら確認していく。

まず本稿では、ドイツ語の「進行形」は *am-* 構造のみ (Van Pottelberge: 2009, p.361-364 / Hentschel & Weydt: 2021, p.40参照) とし、*am-* 構造とこれに競合する諸形式を合わせて“Verlaufsform”と呼ぶ。これらの構造はどれも前置詞と動詞 *sein* を利用する点が共通しているが、この枠組みの中にはめ込まれる動詞の形態は、「名詞化された不定詞 (N^{INF}) / 動詞から派生する名詞 (N^V) / zu 不定詞句 (zu V^{INF})」の3つに分類することができる。Verlaufsform の諸形式を例文とともにまとめて表3に示す：

表3⁴⁾：ドイツ語の Verlaufsform の概観

<i>am</i> ⁵⁾ -構造	(<i>am</i> -N ^{INF} - <i>sein</i>)	Ich bin noch am Überlegen , ob ich das wirklich machen soll. 私はまだ考えている、実際にそれを行うべきかどうかを。
<i>beim</i> -構造	(<i>beim</i> -N ^{INF} - <i>sein</i>)	Sie waren beim Essen . 彼らは食事していた。
<i>bei</i> -構造	(<i>bei</i> -N ^V - <i>sein</i>)	Sie sind noch bei der Auszählung der Stimmzettel. 彼らはまだ投票用紙を集計している。
<i>im</i> -構造	(<i>im</i> -N ^V - <i>sein</i>)	Das Kongresszentrum ist im Umbau (begriffen). 国際会議センターは建て替えの最中だ。
<i>dabei</i> -構造	(<i>dabei</i> -zu V ^{INF} - <i>sein</i>)	Er war gerade dabei , den Koffer zu packen . 彼は、ちょうどトランクに荷物をつめているところだった。

次に、Verlaufsform のうち今回の資料で見られた *am-* 構造と *dabei-* 構造に、どのような制約があるのかを確認しておく。標準ドイツ語の場合、*am-* 構造と共起できる要素は、動詞を直接修飾する副詞だけ (3a & b) であり、直接目的語・間接目的語・前置詞句・不定詞句といった動詞の補足語は共起できない (3c)：

⁴⁾ 表3例文の出典… *dabei-* 構造：独和大辞典 (2000)、その他：Hentschel & Weydt (2021, p.127-128)。

⁵⁾ *am*, *beim*, *im* はそれぞれ、前置詞 *an*, *bei*, *in* と後続の不定詞に付随する定冠詞 *dem* の融合形である。

- (3) a. Während die Piraten noch lustig am feiern sind…
海賊たちがまだ愉快に騒いでいる間に…
- b. Ich bin sehr am Überlegen. 私はひどく思案している。
- c. *Er war das Buch am lesen / dem Freund am helfen / auf seine Frau am warten /
?? am versuchen, seine Freundin anzurufen.
*彼は本を読んでいた / 友人を助けていた / 妻を待っていた / ?? 女友達に電話しようとしていた。

さらに Krause (2002, p.72) は、不定詞の直接目的語を属格で示す (3d) のような例が、データに全く見られなかったという調査結果を示している⁶⁾：

- (3) d. Jemand ist **am Backen** der Brötchen. 誰かが小さなパンを焼いている。

これらの制約から、*am-*構造が表現できる進行性は、あくまでも「動詞」に焦点を絞り込んだものであることが分かる。これに対して *dabei-*構造は、直接目的語などの補足語も不定詞句の中に組み込むため、(3e) のように「動詞句全体」の進行性を表現することができる：

- (3) e. Er ist dabei, einen Brief **zu schreiben**. 彼は、一通の手紙を書いている⁷⁾。

3.1 名詞としての不定詞

「名詞としての不定詞」を利用した *Verlaufsform* は複数あるが、今回の資料で確認できたものは、第11章に現れる *am-*構造が1例のみである。例(4)の2つのドイツ語訳では、「進行性」の表現方法に明確な違いがある：

- (4) a. The sun **was** already **sinking** when I reached the summit of the hill, … (GE)
b. Die Sonne **war** schon **am Untergehen**, als ich die Spitze des Hügels erreichte, … (GD)
c. Die Sonne **ging** bereits **unter**, als ich den Gipfel des Hügels erreichte, … (ITD: p.173)

⁶⁾ 直接目的語の *am-*構造における共起の可否には地域差がある。Van Pottelberge (2009 : p.367-370) は、属格で共起する実例(ごく稀で書きことばに限定される)に加えて、対格で共起するスイス標準ドイツ語の実例を提示している。さらに Flick & Kuhmichel (2013) によると、ラインラントやルール地方、スイスなど特定の地域では、*Ich bin gerade die Uhr am Reparieren*. (私は目下、時計を修理している。) のような、目的語の対格共起が既に可能である。このように、「文法的な正しさ」にまだ地域差があることから、*am-*構造は文法化の途上にあることが分かる。

⁷⁾ 例文(3)の出典は以下のとおりである。(3a~c) : Zifonun & Hoffmann & Strecker (1997, p.1879)、(3d) : Krause (2002, p.72)、(3e) : Baudot (2005, p.152)。下線と太字は本稿筆者による。(3a)と(3c)については、引用元にあるとおり前置詞 *am* に続く不定詞の冒頭を小文字表記にしてある。

私が丘の頂上に着いた時には、太陽が既に a.&b. 沈んでいるところだった… / c. 沈んだ。

GD では不定詞 *untergehen* (沈む) を名詞化した *Untergehen* を用いた *Verlaufsform* を使っている。これに対して ITD は、原書の動詞 *sink* に語彙内容が一致する動詞 *untergehen* の過去形を使用するにとどまり、進行性を積極的に表現するための動詞形態の有標化は見られない。それにもかかわらず、定動詞 *unterging* が示す出来事が「進行中だった」ことが自然に理解できるのには理由がある。この場面で描かれている出来事どうしの関係を理解しやすくしている要素は、接続詞 *als* (～したときに) が導く従属節である。まず、この従属節が叙述する過去の一点における出来事(私による丘頂上への到達)と、主節の動詞の過去形 *unterging* が叙述する出来事(太陽が沈んだこと)は同時に発生している。ただし、太陽が沈むにはある程度の時間を要することを考慮すると、「主語による丘頂上への到達時には、日没が進行中であった」という解釈が成立すると考えることができる。

3.2 zu 不定詞

今回の資料に現れた「zu 不定詞」を含む形式は2種類のみで、本節の冒頭で *Verlaufsform* の1つとして紹介した *dabei-* 構造2例がこのグループに含まれる。*dabei-* 構造は、同一の前置詞を含む *beim-* 構造を展開した形式と捉えることができる：

- (5) a. Er ist beim Schreiben / Kochen.⁸⁾ 彼は書いている / 料理している。
 b. Er ist dabei, einen Brief zu schreiben / Kartoffelsalat zu kochen.
 彼は一通の手紙を書いている / ジャガイモのサラダを料理している。
 c. Ich bin beim Aufräumen⁹⁾. 私は片付けている。
 d. Ich bin dabei, mein Zimmer aufzuräumen. 私は自分の部屋を片付けている。

これら2つの構造に共通する前置詞 *bei* は、空間的近接(～のところで)のほか、同時的な随伴現象(～しながら)も表し、*Er ist beim Schreiben.* と *Ich bin dabei, mein Zimmer aufzuräumen.* を文字どおり直訳すると「彼は筆記しながら／と同時に存在する」「私は、『自分の部屋を片付けること』をしながら／と同時に存在する」となる。

しかし、両構造には補足語共起の自由度に大きな違いがある。*beim-* 構造では目的語の共起が認められず(6b & 6c)、*beim-N^{INF}-sein* という一連の統語的な繋がりは、補足語を受け入れられるまでには文法化が進んでいない：

⁸⁾ Krause (1997 : p.64) より引用。

⁹⁾ Duden (2009: p. 427) より引用。

- (6) a. Er ist **beim Schreiben**. 彼は書いている。
 b. *Er ist einen Brief **beim Schreiben**. *彼は一通の手紙を書いている。
 c. *Er ist **beim** einen Brief **Schreiben**. *彼は一通の手紙を書いている。

結果として、*bei* が示す「同時的な随伴性」の有効範囲はあくまでも「不定詞が示す動作」に限定され、この動詞の補足語はその対象外に置かれたままとなる。しかし、*dabei-* 構造では目的語の共起が可能 (6d & 6e) であり、この自由度は前置詞の前に置かれて、後述される不定詞句全体を示す代名詞 *da-* (それ) によってもたらされる：

- (6) d. Er ist **dabei, einen Brief zu schreiben**. 彼は一通の手紙を書いている。
 e. Er ist **dabei, seinem Bruder einen Brief zu schreiben**.
 彼は兄に一通の手紙を書いている。

このように、*beim-* 構造での前置詞 *bei* の支配範囲、すなわち *bei* が示す「同時的随伴」の対象は、動詞が示す動作に限定されるのに対して、*dabei-* 構造の前置詞 *bei* の場合は、代名詞 *da-* が指示する「不定詞句全体」である。第4章で依頼人に届いた警告状を精査するホームズの様子を述べた(7)のGDでも、*dabei-* 構造に動詞の直接目的語が含まれている：

- (7) a. He was carefully **examining** the foolscap, upon which the words were pasted, … (GE)
 b. Er war **dabei, den Bogen Briefpapier mit den aufgeklebten Wörtern**
 sorgfältig **zu untersuchen** … (GD)
 c. Er **untersuchte** sorgfältig das Kanzleipapier,
 auf dem die Worte aufgeklebt waren, … (ITD: p.53)
 彼は、単語が貼り付けられた便箋を注意深く
 a. 調べていた… / b. 調べているところだった / c. 調べていた。

(7b) と (7c) のように、同一の英文のドイツ語訳であっても、動詞を有標化して進行性を積極的に表現するか否かは翻訳者によって相違があり、ITD では *examine* に語彙内容が一致する動詞 *untersuchen* (精査する・調べる) の過去形を使うにとどまり、原書には無い語の付加も見られない。

さらに第10章の例(8)では、利用している表現形式が2種類に分かれており、いずれも *sein* と組み合わせた動詞の分析的構造となっている。GD の *dabei-* 構造に対して、ITD は別の構造を選択している：

- (8) a. **I am certainly developing** the wisdom of the serpent, … (GE)
 b. Ich **bin wohl dabei**, die Schlaueit einer Schlange **zu entwickeln**, … (GD)
 c. Jedenfalls **bin ich im Begriff**, die Klugheit einer Schlange **zu entwickeln**, … (ITD: p.155)
 たしかに私は、蛇の賢さを a. & b. 育みつつある… / c. 育もうとしている…

(8c)にある動詞句 *im Begriff sein* は、動詞 *begreifen* (理解する) から派生する名詞 *Begriff* を前置詞 *in* と組み合わせた動詞句に *zu* 不定詞句を伴って「ちょうど～しかかっている」という意味を成し、現象の開始段階を強調する表現である。本稿では、この形式を「*Begriff* 構造」と呼ぶ。この箇所以外にも、第1章で自分を訪ねてくる依頼人の足音を聞きつけたホームズが、事件に対する期待感をにじませるシーンでは、どちらのドイツ語訳でも *telic* な動詞句が *Begriff* 構造に組み込まれて使われている：

- (9) a. Now is the dramatic moment of fate, Watson, when you hear a step upon the stair which **is walking** into your life, … (GE)
 b. Das ist jetzt der dramatische Augenblick des Schicksals, Watson, da du einen Schritt auf der Treppe hörst, **im Begriff, in dein Leben zu treten**,¹⁰⁾ … (GD)
 c. Es ist immer ein dramatischer, schicksalhafter Moment, Watson, wenn Sie auf der Treppe einen Schritt hören, der **in Ihr Leben einzutreten im Begriff ist**, … (ITD: p.15)
 今や運命のドラマチックな瞬間だよ、ワトソン、まさに君の人生へ進入しつつある、あの階段の足音を聞くのだから…

ドイツ語の進行形は *ACTIVITY* に相当する *Tätigkeitsverben* (動作動詞) と結びつきやすいことが指摘 (Duden: 2009, p.427 / Flick & Kuhmichel: 2013, p.58-64) されているが、今回の資料では例(8)と(9)が示すように、*Begriff* 構造には *telic* な動詞句との組み合わせしか確認できなかった。

3.3 動詞由来の名詞

このグループには、名詞の派生源となるドイツ語動詞の語彙内容が、原書の動詞と一致している例と、そうではない例の両方が含まれる。まず、前者の例から見ていこう。

追う相手を仕留めるために銃を使わない理由をワトソンが述べる第9章の例(10)では、この男が逃走中であることを表現するため、原書は動詞句 *run away* の進行形を使っているが、2つのドイツ語訳は「逃げる」という意味の動詞を利用した修飾句を選択している：

¹⁰⁾ *im Begriff sein* の動詞 *sein* を省略した表現として、グループCに含めた。

- (10) a. … but I had brought it only to defend myself if attacked, and not to shoot an unarmed man who **was running** away. (GE) … しかし、私が拳銃を持ってきたのは、単に攻撃された場合の防御のためであって、逃走している非武装者を撃つためではない。
- b. … aber ich hatte ihn nur mitgebracht, um mich selbst gegen Angriffe zu wehren, nicht jedoch, um einen unbewaffneten Mann **auf der Flucht** zu erschießen. (GD)
… 逃走中の非武装の男を射殺するためではない。
- c. … aber ich hatte ihn ja nur zu meiner Verteidigung bei mir und nicht, um einen unbewaffneten **flüchtenden** Mann niederzuschießen. (ITD: p.142)
… 非武装で逃げている男を撃ち倒すためではない。

(10b) では、動詞 *fliehen* (逃れる) から派生した名詞 *Flucht* (逃亡) を含む慣用表現を使っている。この前置詞句 *auf der Flucht*¹¹⁾ を文字どおり直訳すると「逃走の上の」となり、これが比喩的に転用されて *Mann auf der Flucht* は「逃走している男」となる。そして、このような「具体的な位置関係」の叙述から「出来事の継続」の叙述が導き出される¹²⁾ ことによって、この男が「目下置かれている状況」を示す前置詞句として機能している。(10c) では、動詞 *flüchten* (逃亡する) の現在分詞 *flüchtend* (逃亡している) を形容詞にして、名詞 *Mann* を修飾している。

(11) は、第12章で岩場から転落して死んだと思われる男を前にしたホームズの台詞である。GD は、原書の動詞 *stroll* に語彙内容が対応する動詞 *spazieren* (散歩する) の過去形と原書には無い副詞 *gerade* を組み合わせているが、ITD は *spaziergehen* (散歩する) から派生する名詞 *Spaziergang* (散歩) と動詞 *sein* を使った状態叙述に、副詞 *gerade* も併用している：

- (11) a. My friend and I **were strolling** on the moor when we heard a cry. (GE)
友人と私が叫び声を聞いた時、私たちはムーアでぶらついていたのです。
- b. Mein Freund und ich **spazierten gerade** über das Moor, als wir einen Schrei hörten. (GD) … 友人と私は、ちょうどムーアを散歩していました。
- c. Mein Freund und ich **waren gerade auf einem Spaziergang** über das Moor, als wir einen Schrei hörten. (ITD: p.191) … 友人と私はちょうどムーアを散歩中でした。

¹¹⁾ この例に動詞 *sein* はないが、「逃走中である」という意味の慣用表現として独和大辞典 (2000) に掲載されている *auf der Flucht sein* の応用形式としてグループ C に含めた。

¹²⁾ 動詞由来の名詞を利用した機能動詞構文において、具体的な「位置関係」の叙述から「出来事の継続」の叙述が導きだされるプロセスについては野上 (2016, p.18) を参照。

(11c) の *auf einem Spaziergang sein* を直訳すると「散歩の表面 / 上にある」となり、やはり具体的な位置関係を叙述する表現が、出来事の継続の表現に転用された言い回し¹³⁾である。

では次に、動詞由来の名詞を利用した表現のうち、その名詞の派生源となる動詞の語彙内容が、原書の動詞のそれと一致していないケースを確認しておく。(12)は第2章で、莫大な遺産を相続すべきバスカヴィル一族の末裔の消息がアメリカで確認されたことを受けて、この人物の捜索が既に行われていることを述べている文である：

- (12) a. …inquiries **are being instituted** with a view to informing him of his good fortune. (GE)
彼に(相続という)幸運を知らせるべく捜索はすでに実施されているのです。
- b. Nachforschungen mit dem Ziel, ihn von seiner Erbschaft zu unterrichten, **sind bereits im Gange**. (GD) 相続について彼に知らせる目的で、捜索は既に進行中です。
- c. Nachforschungen **wurden bereits eingeleitet**, um ihn von dem ihm zufallenden Erbe zu verständigen. (ITD: p.29) 遺産について彼に知らせるため、捜索は既に開始されました。

原書では動詞 *institute* (実施する) の進行形で表現している事柄を、GD は動詞 *gehen* (行く・進行する) から派生する名詞 *Gang* (動き・進展・経過) を含む機能動詞構文 *im Gange sein* (事が進展・進行中である) を使って表現している。これに対して ITD では、「調査が開始された」という事実、すなわち「過去における新たな状態の開始」を直接叙述することによって、当該調査が現在でも継続中であることを含意するという方法を選択しており、この表現は表1のグループDに該当する。このように、同一の原文に対する2種類のドイツ語訳を比較してみると、進行性の表現が多岐にわたることがあらためて確認できる。

3.4 その他の状態叙述

形容詞・副詞・前置詞句を動詞 *sein* と組み合わせて作る状態叙述のグループである。死んでいる脱獄囚を前にしたホームズの台詞(13)(第12章)において、動詞 *run* の進行形で表されている箇所のドイツ語訳はどちらも、副詞句と動詞 *sein* を組み合わせてできる慣用的な状態叙述を使っている：

- (13) a. … but we could not prove that it **was running upon this man's trail**. (GE)
- b. … aber wir können nicht beweisen, dass er dem Mann **auf den Fersen war**. (GD)

¹³⁾ ここで名詞に付随するのは定冠詞ではなく不定冠詞であり、独和大辞典(2000)に慣用表現としての記載もないことから、このフレーズは慣用性が低い可能性もあるが、慣用性の強弱についての考察は本稿では行わない。

- c. … aber wir können nicht beweisen, daß er **hinter** diesem Mann **her war**. (ITD: p.195)
 … でも、僕らはそれ(犬)がこの男を追い回していたことを証明できないだろう。

GDの *jm. auf den Fersen sein* にある *Fersen* は、名詞 *Ferse* (踵) の複数形である。このフレーズを直訳すると「～に対して踵に引っ付いている」となり、この場合の与格 (*jm.*) は *Fersen* の所有者を示す機能があるため「～の踵に引っ付いている」という意味になる。これは、具体的な位置関係の叙述を利用した比喩的な慣用表現で、相手のすぐ後をつけている様子や追い詰めている様子を表す。ITDも慣用表現 *hinter ~ hersein* (～を追い回している) を使っていて、これは *hinter der Arbeit hersein*. (仕事を追い回している：忙しがつている) や *Er ist hinter einem Mädchen/dem Täter her*. (彼は女の子／犯人を追い回している) のように、継続的または習慣的な状態を表す比喩表現である¹⁴⁾。この例においても、英語が進行中の継続的な「動作」として叙述する現象を、ドイツ語は「状態」を叙述する形式を用いて表現している。

4. 進行性と状態叙述の形式

本節では、動詞 *sein* を使った構造(グループC)による進行中の出来事の表現を手掛かりにして、状態叙述の形式を用いた進行性の表現についてあらためて考察する。このグループ18例のうち11例を占める①～③の基となっているのは【前置詞＋名詞＋*sein*】という構造であり、本来は「空間的な位置関係」を表現するものである。そこでは、前置詞が対象どうしの「位置関係」を表示し、動詞 *sein* が「状態」の表示を担っている。Verlaufsformでは、この構造が「現象の時間的な構造¹⁵⁾」の表現として用いられている。その際にポイントとなるのは、前置詞の両義性であろう。これらの形式に含まれる4種類の前置詞はどれも、*an* (～に接して／～のときに)、*bei* (～のそばで／～と同時に)、*in* (～の中で／～のうちに)、*auf* (～の上に／～の期間) のように、空間的意味と時間的意味の両方を備えていることから、位置関係の表現から時間的構造の表現へと、解釈の移行がスムーズに行われると考えられる。

そして、解釈の移行を経て進行形としての文法化が最も進んでいる *am*-構造¹⁶⁾ は、空間的

¹⁴⁾ この段落の例文は、独和大辞典(2000)より引用。

¹⁵⁾ Bhat (1999, p. 43) は、文法範疇としてのアスペクトを次のように表現している：Aspect … indicates the temporal structure of an event, i.e. the way in which the event occurs in time (on-going or completed, beginning, continuing or ending, iterative or semelfactive, etc.).

¹⁶⁾ ドイツ語の Verlaufsform は文法化の進度が形式によって異なることについて、Krause (1997: p.56) は次のように述べている：Insgesamt läßt sich feststellen, daß keine der deutschen Progressiv-Konstruktionen schon vollständig grammatikalisiert ist, die *am*-Konstruktion jedoch auf dem Wege dorthin am weitesten fortgeschritten scheint. Die *dabei*- und die *im*-Konstruktion sind noch am stärksten auf der lexikalischen Ebene verbleiben. さらに

解釈を受け付けない。これに対して、*am-*構造ほどには文法化が進んでいない *beim-*構造では、空間的解釈もいまだに可能である：

- (14) a. Um 6 war ich noch **am Schwimmen**.
 b. Um 6 war ich noch **beim Schwimmen**.

(14 a) は、主語が 6 時に水中において、動詞 *schwimmen* (泳ぐ) が示す行動そのものに従事していなければ成立しない。これに対して (14 b) は、主語が「*schwimmen* が示す行動が行われる一般的な場所」にいた、という空間的解釈も可能である。そのため、主語は 6 時に必ずしも水中で泳いでいる必要はなく、着替えの最中であつたとか、プールサイドに横たわっていた場合でも有効な表現であるという (Krause: 1997, p.54-55)¹⁷⁾。第 3 節での例文のいくつかについて、前置詞の空間的意味と時間的意味の両方を示す¹⁸⁾：

- (7) b. Er war **dabei**, den Bogen Briefpapier mit den aufgeklebten Wörtern sorgfältig **zu untersuchen**.
 彼は「単語が貼り付けられた便箋を注意深く精査すること」のそばに / と同時にいた。
- (11) c. Mein Freund und ich **waren gerade auf einem Spaziergang** über das Moor, …
 友人と私はちょうどムーアでの散歩の途上に / 期間にいた。
- (12) b. Nachforschungen … **sind bereits im Gange**.
 … 調査は既に進展の中に / うちにある。

いずれも、【書き手の視点が出来事の最中にある = 出来事が進行中である】ことを示すために、主語と(動詞から派生する)名詞の間の空間的な位置関係を示す形式を利用している。

多くの言語において、進行アスペクト *progressive aspect* の表現形式と位置関係を表現する副詞句が類似しており、進行中であることを述べるために「*be+in/at V(ing)*」というタイプのパラフレーズを使用することがその基本的な特徴である (Comrie: 1976, p.98-99) という。今回の資料で確認された、動詞から派生する名詞を前置詞および動詞 *sein* と組み合わせた

Krause (2002: p.72) は、直接目的語の共起可能性の違いから、*beim-*構造は *am-*構造よりも文法化の度合いが低いと結論づけている。

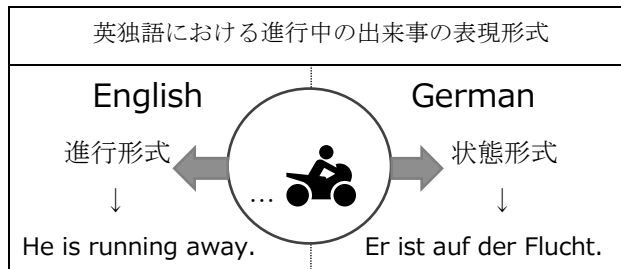
¹⁷⁾ Ebert, K. H. (1996) : Progressive aspect in German and Dutch. In: *Interdisciplinary Journal for Germanic Linguistics and Semiotic Analysis 11*, 41-62 による主張を Krause (1997) より引用。

¹⁸⁾ *Begriff* 構造は「出来事の開始段階」を表現するので、ここでは言及していないが、元を辿ると「何かの現場を取り押さえられる」という意味だったという (Kluge, F. (2012, p.103) 参照)。ここから、この構造も「物理的解釈」から「時間的解釈」への移行を経て現在の意味で使用されていると言えるだろう。

表現形式もその一例と言えらるだろう。

5. 結論

英語で進行形 *be-ing* を使って表現される箇所のドイツ語訳には、原書にない副詞の添加や、進行性が必須でない表現に描写を転換して進行性を間接的に示唆する、などの様々な手段が見られる。そして、動詞 *sein* を使った構造を手掛かりに考察した結果は次のとおりである。動詞形態 *be-ing* が文法範疇として確立している英語では、進行中の出来事を「動的な現象」として表現する。これに対して、ドイツ語で同じ出来事を表現する際、「ある時点において、動作名詞などが表示する時間的な幅や経過のどこかに、主語が位置する」現象として捉えて「状態の表現形式」を用いるというパターンが確認できた。「進行形」としての文法化の過程にあるこれらの形式の使用頻度は決して高くはない。しかし、空間的解釈の有無や使用上の制約の変遷などを継続的に調査することで、文法化の進度を明らかにできると考えられる。最後に、グループ C に関して、進行中の現象の両言語における表現の対比を図式化して示す。



引用・参考文献

- Baudot, D. (2005): Der Infinitiv als Marker der Progressivität im Deutschen: die so genannten Verlaufsformen. In: Marillier, J-F. & Rozier, C. (eds.): *Der Infinitiv im Deutschen*. Stauffenburg. Tübingen. p.147-162
- Bhat, D. N. S. (1999): *The Prominence of Tense, Aspect and Mood*. (SLCS Volume 49), John Benjamins. Amsterdam/Philadelphia
- Comrie, B. (1976): *Aspect. An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge University Press. Cambridge/New York/Melbourne
- Dahl, Ö. (1985): *Tense and aspect systems*. Blackwell. Oxford/New York
- 独和大辞典 (2000) : 第二版、国松孝二ほか編、小学館
- Doyle, A.C. : *Der Hund der Baskervilles, 6. Auflage* (2016). Übersetzt von Gisbert Haeflts, Insel Verlag Berlin
- Duden (2009) : Die Grammatik, Unentbehrlich für richtiges Deutsch, 8. überarbeitete Auflage. Hrsg. von der Dudenredaktion. Mannheim. (= Duden Bd. 4).
- Flick, J. & Kuhmichel, K. (2013): Der am-Progressiv in Dialekt und Standardsprache. In: Vogel, P. M. (ed.): *Sprachwandel im Neuhochochdeutschen*. Walter de Gruyter. Berlin/New York. p.52-76

- Hentschel, E. & Weydt, H. (2021): *Handbuch der deutschen Grammatik. 5 Auflage*. Walter de Gruyter. Berlin/Boston
- Kluge, F. (2012): *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. 25. Auflage. Walter de Gruyter. Berlin/New York
- Krause, O. (1997): Progressiv-Konstruktion im Deutschen im Vergleich mit dem Niederländischen, Englischen und Italienischen. In: Stolz, T. (ed.): *Sprachtypologie und Universalienforschung 50 (1)*. Walter de Gruyter. Berlin/New York. p.48-82
- Krause, O. (2002): *Progressiv im Deutschen, Eine empirische Untersuchung im Kontrast mit Niederländisch und Englisch* (Linguistische Arbeiten 462). Niemeyer. Tübingen
- 野上さなみ (2008) : ドイツ語における不完了アスペクトについて, 『ニダバ』 第37号, 西日本言語学会編, p.96-105
- 野上さなみ (2016) : ドイツ語の慣用表現における継続の概念について, 『ニダバ』 第45号, 西日本言語学会編, p.11-20
- Reuters, H. (hrsg.) : *Der Hund der Baskervilles / The Hound of the Baskervilles*. Zweisprachige Fassung. © 2002, 2012, In: Gutenberg Projekt-DE, Hille und Partner. <https://www.projekt-gutenberg.org/doyle/2basker/2basker.html> (2022年3月9日)
- Van Pottelberge, J. (2009): Progressiv. In: Hentschel, E. & Vogel, P.M. (eds.): *Deutsche Morphologie*. Walter de Gruyter. Berlin/New York. p.358-384
- Vendler, Z. (1967): Verbs and Times. In: Vendler, Z. (ed.): *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press. Ithaca/London. p.97-121
- Zifonun, G. & Hoffmann, L. & Strecker, B. (1997): *Grammatik der deutschen Sprache*. 3 Bände. Walter de Gruyter. Berlin/New York